

トマス・リードの心の哲学(8)

—道徳の第一原理について—

石川 徹

これまでトマス・リードに関する一連の論文において、我々は彼の最後の名著である『人間の能動的諸力についての諸論文 (Essays on the Active Powers of Man)』(1785) に所収の各論文をくわしく追って論考を加えてきた¹。そして、本論文ではその最終論文である第五論文「道徳について (of Morals)」を検討する。

1

まず手始めに同書において、なぜ結論に当たる最終論文が道徳についての論考となっているかについて考察しよう。

同書は「力能一般 (Active Powers in General)」「意志 (will)」「行為の原理 (The Principles of Action)」「道徳的行為者の自由 (Liberty of Moral Agent)」の順に主題を展開していく。これらのいずれもが、全体を統括する題名である「人間の能動的力」というトピックの題材としてふさわしいと言えよう。ところが最後の「道徳」はその関係が一見したところでは明らかではない。逆にいえば、最後に道徳に関する考察を置いていることが、この書におけるリードの目的と意図を理解する鍵となると言えよう。

さらに、この論文は「道徳の第一原理について (of the First Principles of Morals)」「道徳の諸体系 (of Systems of Morals)」「自然法学の体系 (of Systems of Natural Jurisprudence)」「道徳的承認に値する行為はそれが道徳的に善であるという信念を伴ってなされなければならないか否か (Whether an Action deserving Moral Approbation, must be done with the Belief of its being morally good)」「正義は自然な徳か人為的徳か (Whether Justice be a natural or an Artificial Virtue)」「契約の本性と責務について (of the Nature and Obligation of a Contract)」「道徳的な承認は実在的な判断を含意する (That Moral Approbation implies a real Judgment)」の七章からなっている。この論文の構成もまた奇妙である。最初に道徳の第一原理なるものを提示しているので、そこから、彼自身の道徳哲学の体系を展開することが期待されるにもかかわらず、それ以降、彼はヒューム道徳論の細かな議論の反駁を詳細に行うことに進んでいくからである。我々はこのような構成の中にもリード哲学の重大な特徴を見いだすことができると思う。

本書の構造も、本論文の構造もある共通点をもっている。それはどちらもリード自身が最も積極的に自身の主張として提示したい内容と、最も重点的に論じている内容がずれているということである。本全体から見ると、リードの最も主張したいことが道徳に関する自らの見解であることは明

白である。最終論文以前の諸論文は、内容的には人間の能動的力についてであり、その書名にふさわしいものである。しかし、ここまでの我々の論文で論述してきたように、それらの論文も必ずしも因果論一般、行為論一般をその内的論理に従って追求したものとはいえない²。ヒュームの因果論および道徳論を常に念頭に置いて、しかも、その批判の動機は、リードの考える道徳論をいかに維持しうるか、より詳細に言えば、人間の自由意志の確保と同時にその自由が理性にしたがって人間が行為するということと両立可能であることを何とか示そうとすることにあった³。以上の内容からすれば、最終論文では（全体の書名からは、ずれるが）、これ以前の論文での論考を前提に、リード自身の道徳的な主張が最終的な結論として述べられることが期待される。ところが、この期待はほどなく裏切られる。この論文では、同書全体の構造とは逆の形で展開する。リードの道徳的主張が簡単に述べられた後に、それらの正当化ないし詳細な展開が予期されるにもかかわらず、自分の主張と他の学説との関係が簡単に述べられた後、大部分はヒュームの議論、とりわけ自然な徳としての正義や、契約論に関してかなり詳細に逐次的な反論が展開されている。これを最初に提示された道徳の第一原理の応用ないし展開、もしくはその正当化とみなすことはきわめて困難である。このような事情を鑑みると、リードの哲学はヒューム哲学をその論敵としているという以上に、ヒューム哲学との対比においてのみ自らの思想を語り得ているのであって、彼の哲学的な議論はヒュームの議論と密接に、というより不可分な形で理解しなければならないことを示しているように思われる。

しかもこの事情は、道徳論においてさらに顕著である。認識論の場合はまず主要なターゲットである観念説を批判するために、いわゆる知覚表象説に対抗して自らの独自の知覚論（直接実在論）を提示する。そして、その知覚論がヒュームの理論（リードが懐疑論であると評価している内容）に対する反論としての第一原理に結び付いている。⁴そしてその第一原理は、ヒュームが自然的信念として受け入れざるを得ないものとしているものと、実は内容的には重なってくる。つまり、どちらもそれが我々の認識にとっては基本的な信念を構成しているということ自体は承認しているものに帰着する。要は二人の違いはそのような信念をどのように説明するかの違いであるとも言える。

ところが道徳の場合はそう簡単ではない。認識における自然な信念とは異なり、リードの提示する第一原理は本人が主張するほど自明なものには思えないからである。第一原理は我々にとって不可避免的に正しいことを判明に認識できるようなものではない。例えば、外的対象の実在性を疑うことは、たしかに一般人にとっては難解な形而上学を経なければ了解可能ではないかもしれない。しかし、道徳の領域においては、我々にとって基本的に思える信念であっても、そのような難解な推論の助けを借りずに、普通の人々の間に存在する判断の不一致から簡単に疑念をもつことができる。つまり道徳などの価値判断に関しては、自然科学的事実のような普遍性を持つ原理が存在するというはリードが言うほどに明証的ではない。この事実をどう解釈するかは道徳論一般を論ずる上での重要な問題となってくる。

このような事実認識の問題と価値判断の問題の相違をリードがどの程度意識していたかは定かではない。しかし、この相違が結局において、リードの論述の不自然な構造の中にあらわれていることはかなり明白であるように思われる。少なくとも、本論文の道徳論の構造においてはより明らかである。

2

この事情に関しては、当時の道徳論の議論の様相からある程度推測することができる。当時の道徳の基礎についての議論は、道徳の基礎が自然で実在的な区別に存するという立場と、そのような

基礎を持たない人為的なものであるとする立場があった。前者の中にそれを見いだす力を理性に求める立場と、感情に求める立場が存在した。後者では、さらに道德の基礎は利己心を最終的な動機とする、従って人為的な構成物であるとする立場と人間には本来道德的な感情が備わっているという立場が存在し相争っていた⁵。リードは、道德判断において、理性の働きを強調する点で理性主義の立場に立つように見えるが、道德的な承認や否認に関しては生得的な働きのように論述していて、ハチスンなどの立場に大きく接近しているように見える。そしてこれらのいずれも、ヒュームがその理論的基盤に対して鋭い批判を加えたものである。したがって、リードがどのような理論的基盤をとるにせよ、ヒューム哲学の批判それ自体は必須である。そして本来ならば、それに加えて、リード自身の哲学的体系を対案として提示する必要がある。もちろんリードはそれが常識哲学であり、第一原理の提示であるというであろう。しかし、この方策は認識論の場合ほど効果的であるようには思われない。なぜなら、認識論の場合は少なくともその基盤としてリード自身の独創的な知覚論が存在して、リードの言う常識、第一原理を支えているのに対して、道德論においては、おそらくは同様の意図をもってリードが展開している因果論批判は、それ自体ヒュームの因果論に十分対抗できるほどのパースペクティブをもっていない。さらに、その有効性は、行為論における理性の役割に関する疑問という点に限定されているからである。つまり、本来の意図である自分の道德論自体の支えとなるほどの力をリードの因果批判はもっていないのである。道德論の前提となる行為論のある部分に関係はするものの、リードの道德論の実質的な内容となるべき彼の第一原理そのものとの関係は薄いと云わざるを得ない。それ故に、リードはこの書の最終段階になって再びヒューム批判を繰り返さざるを得ない。それ以外に自分の哲学を展開するすべがないからである。リードの主張する道德的な内容の問題とは別に、このような事情が、本書、および最終論文の構造を見通しの悪いものになっているとすることができる。

以上の事がらを念頭に置いて、リードの実際の論述がどのようなものになっているかをくわしく見てみよう。

3

先に述べたように この論文の第一節は道德の第一原理についてから始まる。まずリードが第一原理としてここで挙げているものを列挙してみよう。ただし、これらは完全な枚挙でないことをリード自身が言明している(270)⁶。ここで取り上げられているのは徳と悪徳一般に関するもの六つと、より特殊なもの五つである。単純な命題の形で表現されているとは言い難いものも多く、長くなるが、すべてを引用しておく。

- 1「人間の行動の中には承認と称賛に値するものがあり、また非難と罰に値するものがある。また承認の程度も非難の程度の異なるのは行為の異なることによる。」(271)
- 2「全く自発的でないものは道德的承認にも非難にも値しない。」(271)
- 3「不可避の必然性からなされたものは、心地よいことも不快であることもできるし、有用であることも有害であることも可能であるが、道德的非難や称賛の対象にはなりえない。」(271)
- 4「人はなすべきでないことをしたのが咎められるべきであると同様に、なすべきであったことをしなかったことも咎められるべきである。」(271)
- 5「我々は我々の義務をよく知るためになし得る最良の手段を使用すべきである。道德的な教示に真剣に注意を払うことや、他の人間、それが知り合いであっても歴史上の人物であっても、その人において我々が承認することや否認することを観察することによって、悪であったものと正しかったもの、そして、より善かったであろうものを識別するために、平穩で感情を抑えた時にわれわれ自身の過去の行動を反省して、我々が善きことをなす可能性がある機会、悪をなす誘惑を

可能な限り予見するように未来の行動について冷静に公平に熟考することによって、道徳における優越が人間の真の価値であり栄光であるように、我々の義務の知識はすべての人間にとって、人生の全ての段階で、我々のもつ知識の中で最も重要なものである。」(271)

- 6「我々の知る限り、我々の義務をなすということ、そして、そこから逸脱する全ての誘惑にさらうように、我々の精神を強化することは、我々の最も真剣な関心事であるべきである。正しい行動の美しさについて、その現在及び未来における報酬、悪徳の腐敗と、その今生及び来世の悪しき帰結についての生き生きとした感覚を維持することによって、我々の目にもっとも高貴な模範を常にとどめておくことによって、我々の情念を理性の支配に常に服させるという習慣によって、我々の行動に関して堅固な目的と決心をもつことによって、できるときは誘惑の機会を避けることで、すべての誘惑の瞬間に我々を創造した方の助けを求めることによって、なすべきなのである。」(271)

続いて、より特殊な原理を引用する。

- 1「我々はたとえ離れていても、小さな善よりもより大きな善を選ぶべきである。そして、より大きな悪よりもより少ない悪を選ぶべきである。」(272)
- 2「人間の構成に自然の意図が明白であるかぎり、我々はその自然の意図に従うべきであり喜んでそれに行為すべきである。」(273)
- 3「自分自身のためだけに生れた人間はいない。それ故に、すべての人は自分自身を人類という共通の社会の一員として、また自分が属しているその下位の社会例えば、家族、友人、隣人、国などの一員として考え、自分がその部分である社会にできるかぎり善きことをし、またできるかぎり害を与えることを少なくするべきである。」(274)
- 4「あらゆる場合に、もしわれわれが他者のいる状況にあったならば、我々に対してそうふるまうことが正しいと判断することを他者に対して行為すべきである。より一般的に言えば、他者において承認するものを、類似の状況においては実践すべきであり、他者において我々が非難するものをなすべきではない。」(274)
- 5「神の存在完全性及び摂理を信じる全てのものにとって、我々が神に対して負っている、崇拝と従属は自明である。神及び神の御業に対する正しい気持ちは全ての知的存在者にとって我々が神に対して負っている義務を明白なものにするだけでなく、正しい行動の全ての規則に対して神の法の権威を付け加えるものである。」(276)

4

以上リードが例示している第一原理は、我々が通常この語から連想する、例えば、デカルトの「コギト・エルゴ・スム」のような原理とは明らかに意味を異にする。一般的には第一原理は幾何学の公理同様に少数であり、単純であり、そしてそれを基礎にして他の真理が全て論理的な推理によって導出できるようなもの、もしくは他の真理の判定をそれに基礎づけてできるようなものと理解されよう。リードもそのようなものを構想としているように見える。草稿には「公理」となっているところが原理とされているし⁷、また本文中でも原理を「公理」という言葉で言い換えている箇所がある。また、原理とそこから導出される命題とでは、明証性が異なり故にこれらの第一原理を証明しようとする試みはある意味決定的なものとならないともいう(270)。なぜなら、それらは文字通りの意味で自明であるからである。しかし、このような語の使用法から通常予想される次の工程は、このような基礎の上に具体的に学を組み立てることであったり、枚挙された原理が必要十分であるかどうかを検証したりすることであるが、リードはそうはしない。従って、リードが学問的な体系を意識してこのような言葉づかいをしているとしても、我々は彼の構想をこの言葉通りに受

け入れるわけにはいかない。リードは少なくとも従来の意味で学問的な体系を構築することを目指しているようには思えないのである。彼が第一原理と言っているものは、このような仕方を受け入れるとするとあまりにもずさんであるように見える。先に述べたように、リード自身は、この第一原理は知的な能力における第一原理と同様なものとして、認識論と道徳論の並行的な関係を構想しているが、これも額面通りに受け入れるわけにはいかない。

彼は明示的には認めてはいないが、認識論において第一原理としているのはヒュームが自然な信念と呼んだものであり、それに依拠することができなければ我々の生そのものが崩壊するようなものであった。その意味で常識と呼ぶことに十分な理由があったともいえる。しかし、道徳の第一原理は体系的でもなければ、単純でもなく、また完全に枚挙されてもいない。しかも第一原理として挙げなければならないような根拠も示されているとはいいがたい。その意味では、リードの言にこだわらず、彼の真意を推測してみる必要があるがまず、各原理を検討してみよう。

まず原理1から始める。この原理の特徴は道徳的善悪そのものの存在ではなく、我々の道徳的承認や否認の対象の存在主張をしているということである。リードは道徳に関しても実在論的立場をとるのであるが、出発点としては我々人間の側の認識能力から始めていることになる。ヒュームその他の論敵との相違を意識してのことであるかもしれない。しかし、第一原理である以上それ自体が自明であるという以上の正当化はない。あるいは、道徳哲学はどのようなものであっても、我々の道徳的判断そのものの存在を疑うことはないという意味で、すべての論者がこれを認めているという意味で、これを第一原理としているのかもしれない。いずれにしろここだけでは判断しかねる。

原理2は、それ自体としては一般的に承認される内容ではある。しかし、ヒューム批判という観点からすれば、ヒュームの言う意味での徳が必ずしも自発性という要素を必要としないという点⁸を意識しているのかもしれない。どちらにしろ、道徳的判断の対象そのものが、人格の性質である徳であるよりは、一個一個の行動の性質であるということに基づいている点で、一定の立場をとっているのであり、その点で必ずしもすべての人間が同意をすることは限らないとはいいうのであろう。

原理3は原理2の言い換えともとれるし、また一般的な考えを指しているとも考えられるが、同時に自由と必然性が両立しないという非両立論の立場をリードが鮮明にしているとも考えることもできる。しかし、基本的には原理2の言い換えである以上、少なくとも公理という言葉には不相当であるので、リード自身がどのような観点で原理を選び出しているのか、その基準は不明なままである。

原理4は非難の対象が、積極的行為ばかりではなく、行為しないという消極的なものも含むという、原理1の補足的説明とも言うべきものである。たしかに一般的には承認される内容であるが、原理としての地位をもつのかという点においては原理3と同様疑問を持たざるを得ない。

原理5は1から4までに比べてはるかに長文である。ただし、肝心なのは最初の主文のみであり、我々は義務を知る努力をしなければいけないという規定である。後はその方法の列挙である。何故このようにその手段を数え上げる必要があるのかに関しては定かではないが、単に長いということだけが前の四つとの相違ではない。前の諸原理は道徳的判断の対象となる事柄の存在および性質に関する言明であるのに対して、この原理5は我々の努力義務の規定である。しかも、道徳的行為そのものに関する努力義務ではなく、それについて知的な努力を払わなければならないという義務である。そしてこれは、原理の自明性という主張からすると整合的でないことを主張しているように思える。リードにしたがえば、我々はきわめて容易に道徳原理を知りうるはずだからである。さらにその上に建てられる体系に関しても困難さはないと主張する。だとすれば、この主張は何を

意味するのだろうか。勿論現実の状況に際して我々はどうすべきか迷い悩む。そして事後になって自分の判断の不十分性に気付き反省する。これは経験的事実である。そのような人間の現実のあり方に対する一般的な注意としてならこの命題には特に不審な点はない。しかし、それはあくまで我々が道徳的に行為する際の補助的な指針であり、体系の基礎となる第一原理であるようには思われない。もちろんリード自身は我々が考えるよりはるかに主知主義的な思想家であって、道徳的に行為をするように努めることよりも、何が道徳的に正しいことかを知ることには重きを置いていたという可能性は残る。行為における理性的原理の役割を何よりも強調する立場からはそのように考えることもできる。しかし、一方で常識自身の自明性を前提に、行為の道徳性を何よりも行為の自発性(自由)に求めている点からすれば、彼の道徳説はより主意主義的な立場に見える。恐らくは道徳説としての首尾一貫性よりも常識の自明性をとるとリードは主張し、それが折衷主義的な都合主義に見えることよりも優先するというものだろうが、認識論の場合と異なり、その常識そのものがそれほど自明ではないと考えると、リードのこの枚挙そのものが恣意的にしか見えてこないと評されても仕方がないことであるだろう。

原理6は原理5が主知主義的な主張だとすれば、主意主義的な主張ということになる。これもまた、学問的体系を抜きにして、常識的な指令として考えれば特に大きな問題をはらむものではない。しかし、学問の基礎である第一原理という性格を与えようとしているという点を鑑みると不満が残ると言わざるを得ない。要するにリードは常識という語を二様に使い分けているのではないかと思われる。一つは普通人が通常もっていることが期待される信念という意味、他方は全ての人にとって自明でありそれ以上の基礎づけを必要としない原理という意味である。前者の意味での常識が後者の意味での性質を備えているとは限らない。にもかかわらず、リードは常識という語で呼ぶものに対してこの二つの性質の両方を兼ね備えていることを前提としているように思われる。

さてさらに特殊な原理として挙げているものを見てみよう。

特殊原理1は、道徳の原理というよりも一般的な合理性の要件であるように見える。これは道徳が理性的なものであるという主張をとると、他から導出可能でないという意味の自明性をもつというよりも、合理的であることそのものの要請から導出されることが自明であるような内容であり、これを原理それも特殊な原理としておくことの意味は不明である。あるいは表には出ていないが、道徳的判断そのものもつ合理性を否定しようとするような立場を念頭に置いている可能性もあるが、残念ながら具体的には思いつかない。

特殊な原理の2はいわば自然主義の立場の主張である。これは恐らく神の創造という観点と密接な関係をもって主張されることと思われるが、もしそうであると他から導出可能なものということになり第一原理の資格に合わない。そして道徳の人為性を主張する論者に対してはこの原理は何ら自明性をもたない主張であり、しかも一般的な原理とは異なり、この原理を使用しなくても十分に通常の道徳的な信念の体系を支えることは可能であるように思われる。

原理3は道徳が社会を前提としているということの確認であるが、これは例えば特殊原理の2の系のように受け取ることができる。また独立の主張であるとしても、これはヒュームがなした「である」から「べきである」への移行を行っている⁹事例であるから、彼の批判を免れることはできないように思われる。そのためには自明性の主張ではなく、この移行そのもの、つまりは道徳的な規範性そのものに関する根底的な根拠づけが必要であり、でなければ、論敵は原理という位置づけも、自明性も共に認めないであろう。

特殊な原理4は道徳の普遍妥当性の主張であり、これに関しては道徳の起源はともかく、道徳的判断の妥当性を認める人は全て承認するものであるから、原理という名にふさわしいものである。しかし、であるとすると逆に、なぜ一般の原理ではなくより特殊な原理としておいているのかその

理由が不明である。

特殊な原理5は信仰と道徳の関係であり、非キリスト教徒である我々にとってはさしたる興味がない。また神の話は必ずしも他の第一原理と結び付けられて語られているわけではない。少なくとも道徳の体系の議論としては、リードの立場は理神論者に近いと考えられるが、これはさらにもっと多くの考察が必要である。

5

以上リードが挙げた九つの第一原理を概観してみたが、ここから言えることは少なくともリードの言う体系を我々が連想するような意味での学的な体系とすることはできないということである。したがって、ここで述べたさまざまな疑問や批判に対して、リードからは的外れだという回答になって帰ってくるのかもしれない。リードにとっては学問の体系が道徳を基礎づけるのではなく、常識という形で我々にとって自明であるような原理がばらばらにあり、道徳の体系というのは、それを一元的に説明するための道具であると考えた方がよいのかもしれない。そのことは、第2節および第3節で道徳の諸体系及び自然法学の体系の取り扱いからその可能性をうかがえる。道徳に関して唯一のリードの哲学的体系が存在するわけではなく、リード自身が妥当性を認める体系は複数存在するからである。

しかしであるとするならば、やはりリードが第一原理として挙げたものの妥当性と枚挙の完全性の問題は問われる必要があると言わざるを得ない。我々の認識を成り立たしめる自然な信念の場合とは異なり、この内容自体を疑うことは充分可能であるように思われるからである。そして、それらの諸体系とリードの言う原理がどのような関係にあるかも十分考えておかなければならない。

最終的なリードの道徳論に関する結論は本書だけでなく講義録である『実践的倫理学』(*Practical Ethics*)の検討も合わせ行わなければならないので本論文では保留ということにしておきたい。ただ暫定的な結論としては、このようなリードの考えは必ずしも自覚的に徹底されているわけではなく、それが最初に指摘しておいた、本書および本論文の構成の不自然さに通じているということだけは確認できるように思う。

本稿はここでいったん閉じることにして、項を改めて、リードの第一原理と道徳の体系との関係に関して先に述べた仮説が正しいのかどうか検討することにした。

註

¹ 拙論「トマス・リードの心の哲学(2) - 力の概念について -」(香川大学教育学部研究報告第一部、121号(2004)、pp.85-95)、「トマス・リードの心の哲学(3) - 意志について -」(香川大学教育学部研究報告第一部、123号(2005)、pp.27-38)、「トマス・リードの心の哲学(4) - 行為の諸原理について(上) -」(香川大学教育学部研究報告第一部、125号(2006)、pp.33-41)、「トマス・リードの心の哲学(5) - 行為の諸原理について(下) -」(香川大学教育学部研究報告第一部、125号(2006)、pp.42-49)、「トマス・リードの心の哲学(6) - 道徳的行為者の自由について(上) -」(香川大学教育学部研究報告第一部、133号(2010))、pp.81-87)、「トマス・リードの心の哲学(7) - 道徳的行為者の自由について(下) -」(香川大学教育学部研究報告第一部、135号(2011)、pp.59-72)

² 前掲論文中特に「トマス・リードの心の哲学(4)」及び「(5)」を参照せよ。

³ 前掲論文中特に「トマス・リードの心の哲学(6)」及び「(7)」を参照せよ。

⁴ 認識における第一原理に関しては『人間の知的能力に関する論文集 (*Essays on the Intellectual Powers*)』(1782)で述べられている。書名からも推察されるように両者は二つでリードの哲学体系全体を示すものとして計画されている。よって、より正確には両者の取り扱いの異同について詳しく考察しなければならないが、この

課題に関しては他日を期すこととしたい。

- ⁵ 合理主義者の代表がクラーク (Samuel Clarke) であり、道徳感覚論者の代表がフランシス・ハチスン (Francis Hutcheson) である。そして人為性を主張するのが、マンデヴィル (Bernard de Mandeville) である。
- ⁶ 括弧内の数字は近年新たにエディンバラ大学出版局より出版されているリード全集の Thomas Reid, *Essays on the Active Powers of Man*, (eds) Kind Haakonssen and Paul Wood (2010) のページを表す。これまでの一連の論文では、19世紀に編纂された Hamilton 編集の復刻版を使用していたが、さまざまな点でこちらが優れているので変更することにした。今後はこの版が決定版として使用されるであろう。
- ⁷ 前掲書編者による脚注 p.271 の 1
- ⁸ ヒュームの「徳」という語の用法に関しては、デイヴィッド・ヒューム『人間本性論第二巻－情念について』(石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳 法政大学出版局2011年)の訳注2.1.7(8) p.209を見よ。
- ⁹ いわゆる「である」「べきである」問題に関しては拙論「自然主義的誤謬と「である—べきである問題」」(中才敏郎・美濃正編『知識と実在』所収 pp.196-222)を見よ。

Thomas Reid's Philosophy of Mind (8) - of the First Principles of Morals -

Toru ISHIKAWA

Abstract

In this paper, the author attempts to examine the first principles of morals. Reid says they are self-evident and the foundations of all our moral judgment. But they don't seem to be what Reid maintains. The author thinks we have to reconsider the exact meaning of Reid's way of thinking in Philosophy.

Firstly, the author points out something curious in Reid's writings and considers they reflect the fact that his thoughts could not subsist in itself. Without reference to David Hume's Philosophy we cannot understand Reid's System adequately.

Secondly, the author examines Reid's principles individually and observes they are collections of different kinds. This result makes us reconsider their character and roles in Reid's theory, especially in relation to his concept of "common Sense".

Finally the author concludes we have to reexamine the relation between common sense and systems of philosophy in fundamentally different way. It is the only way to interpret Reid's Philosophy consistently.